

# アイデンティティ及び“恋愛関係の影響”による大学生の恋愛関係継続/終了の予測

高坂康雅 *KOSAKA Yasumasa*

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果
- 4 — 考察

【要旨】本研究の目的は、ある時点において恋人がいる青年（大学生）を対象として調査を実施し、その対象者に対し全3回の縦断的な追跡調査を実施することにより、アイデンティティ及び「恋愛関係の影響」が恋愛関係の継続/終了の予測可能性を、明らかにすることであった。第2回調査の時点の恋愛関係の継続/終了、及び第3回調査時点での恋愛関係の継続/終了を独立変数に、アイデンティティや「恋愛関係の影響」について比較したところ、「恋愛関係の影響」の「他者評価の上昇」が短期的な恋愛関係の継続/終了を予測することが明らかになった。またアイデンティティの感覚や「恋愛関係の影響」の「充足的気分」も、短期的な恋愛関係の継続/終了を予測する可能性が示された。

## 1 — 問題と目的

恋愛は青年にとって重大な関心事のひとつであり、多くの青年が異性と親密な関係（恋愛関係）をもちたいと望むようになる。また青年期後期に相当する大学生の約40%には実際に恋人がおり（日本性教育協会, 2007）、恋愛関係をもった経験がある大学生は80%に達する（大野, 1999）。しかし、恋愛関係は終了・解消し得る関係であり、特に青年期の恋愛は失恋に終わりやすいことが指摘されている（宮下・臼井・内藤, 1991）。一方で、長期間継続する恋愛関係もあり、恋愛関係の継続・終了の予測因を明らかにしようとすることは、対人関係の親密化に関する重要な研究テーマのひとつである。

恋愛関係の継続/終了の予測因を明らかにするためには、一般的には、ある時点（X）におけるカップルの特徴を測定し、その後の時点（Y）において、関係が継続しているか終了しているかを、縦断的に追跡調査し、継続していたカップルと終了していたカップルの時点Xにおける特徴を比較する手続きがとられる。例えば、Hill, Rubin, & Peplau（1976）は

大学生を主としたカップルを対象に2年間の追跡調査を実施している。その結果、2年間に220組中103組の関係が終了していた。また、関係が終了したカップルは、継続していたカップルに比べ、2年前の時点で、親密さや結婚の可能性を低く見積もり、恋人に対する愛情が低く、デート期間も短かく、年齢や将来の最終学歴の高さ、学力、身体的魅力などの特性に関する恋人間の類似性が低いことが明らかにされている。また、Simpson (1987) は恋人のいる大学生を対象に3ヶ月間の追跡調査を行っている。その結果、234名の対象者のうち94名が3ヶ月の間に関係が終了していた。また、関係が終了していた者は継続していた者に比べ、3ヶ月前の時点で、関係満足度や親密度が低く、長期間にわたるデートをしておらず、恋人との間での性体験率も低く、恋人に代わる相手が見つかりやすいと思っており、セルフ・モニタリング傾向が高いことなどを明らかにしている。

このように、恋人がいる者に対する縦断的な追跡調査は、恋愛関係の継続/終了の予測因を明らかにする上で非常に有効な手法である。しかし、日本では、このような縦断的な追跡調査は行われておらず、Hill et al. (1976) などで示された予測因が日本人の恋愛関係の継続/終了の予測因としても有効であるかは検討されていない。また、Hill et al. (1976) や Simpson (1987) では、関係満足度や親密度、恋人との類似度、恋人に代わる相手の見つけやすさなど、主に現在の恋愛関係や恋人に対する認知・評価を予測因として取りあげている。一方、宮下他 (1991) が青年自身の不安定な内面的問題などが恋愛関係の成立・維持を困難にしていることを指摘しているように、対象者が青年 (大学生) であることを考慮すると、恋愛関係の継続/終了の予測因として青年期特有の心性を取り上げる必要があると考えられる。

恋愛関係の継続/終了の予測因として考えられる青年期特有の心性として、アイデンティティ形成が考えられる。Erikson (1950) は青年期の恋愛を“自己の同一性を定義づけようとする努力”であると述べ、また“本当に親密であるためには、少なくとも、むしろ確固たるアイデンティティが発達中でなければなりません”とも述べている (Evans, 1967)。大野 (1995など) は、“親密性が成熟していない状態で、かつ、アイデンティティの統合の過程で、自己のアイデンティティを他者からの評価によって定義づけようとする、または、補強しようとする恋愛的行動”を「アイデンティティのための恋愛」とし、アイデンティティのための恋愛の特徴のひとつとして、“結果として多くの場合交際が長続きしない”をあげている。これらの指摘から、青年のアイデンティティの確立が不十分である場合、恋愛関係を構築できたとしても、長続きすることはないと考えられ、恋愛関係の継続/終了の予測因のひとつとして、アイデンティティをあげることができると考えられる。

また、高坂 (2009, 2010) は、“恋愛関係をもつことによって生じたと青年が認知している心理・実生活的変化”を「恋愛関係が青年に及ぼす影響」(以下、恋愛関係の影響)として捉え、ポジティブな影響である「自己拡大」、「充足的気分」、「他者評価の上昇」と、ネガティブな影響である「時間的制約」、「経済的負担」、「他者交流の制限」、「関係不安」の合計7因子を抽出している。「恋愛関係の影響」は青年の恋愛関係の状態をとらえるひとつの指

標であり、特に女子においては関係満足度との関連が指摘されている (高坂, 2009)。このことから、青年が恋愛関係においてポジティブな影響を受けていると感じている場合は、恋愛関係が継続し、ネガティブな影響を受けていると感じている場合は、恋愛関係が終了に向かうと考えられ、「恋愛関係の影響」も恋愛関係の継続/終了の予測因のひとつと考えられる。

以上から、本研究では、ある時点において恋人がいる青年 (大学生) を対象として調査を実施し、その対象者に対し縦断的な追跡調査を実施することにより、アイデンティティ及び「恋愛関係の影響」が恋愛関係の継続/終了の予測可能性を、明らかにすることを目的とする。

## 2 — 方法

### 調査の分析対象者

本研究で用いるデータは、大学生を対象とした全3回の縦断調査「大学生の恋愛関係と自我発達に関する縦断調査」で得られたデータの一部である。第1回調査 (Time 1) は、2010年5月下旬から6月下旬に北海道・関東・東海・中部・四国の4年制で男女共学の14大学に通う1350名を対象に調査を実施した。この調査において、「恋人がいる」と回答した485名に縦断調査への協力を求め、318名が調査協力に同意した。

第2回調査 (Time 2) は、2010年9月下旬から10月下旬に縦断調査への協力に同意した318名を対象に郵送で実施し、226名から返送が得られた (回収率71.1%)。

第3回調査 (Time 3) は2011年1月下旬から2月下旬に実施した。第2回調査に対し返送をし、第3回調査への協力に同意した220名を対象に郵送で実施し、193名から返送が得られた (回収率87.7%)。

第2回調査と第3回調査は郵送で行うため、第1回調査の際に縦断調査への協力に同意した対象者には、郵便番号、住所、氏名、恋人のイニシャルを記入するように求めた。その際、これらの個人情報著者のみが管理すること、調査以外での目的では使用しないこと、調査終了後には破棄・消去すること、一度同意しても後に拒否することができることなどを紙面で伝えた。また、対象者には、第2回調査と第3回調査に回答するごとに謝礼 (500円分の図書カードまたはQUOカード) が渡され、第3回調査終了時点で、調査結果に関するフィードバックが行われた。

第1回調査で「恋人がいる」と回答し、縦断調査への協力に同意した者 (Time 1 恋愛群) は、男子129名、女子189名、合計318名であった。平均年齢は19.5歳 (標準偏差 1.1歳) で、平均交際期間は13.4ヶ月 (標準偏差 14.3ヶ月、レンジ1-102ヶ月) であった。

第2回調査に対して返送した226名のうち、175名 (男子58名、女子117名) は恋愛関係が継続しており (Time 2 継続群)、51名 (男子20名、女子31名) は関係が終了していた (Time 2 終了群)。

第3回調査に対して返送した193名のうち、127名（男子38名、女子89名）は関係が継続しており（Time 3 継続群）、23名（男子8名、女子15名）は第2回調査と第3回調査の間に関係が終了していた（Time 3 終了群）。

### 調査時期・実施手続き

調査は2011年5—6月に、集団で実施した。実施の際には、調査への協力は任意であること、無記名であること、回答を拒否したり、途中で中断したりすることができること、回答を拒否したり中断したりしても、不利益は生じないことなどを、表紙に明記し、口頭でも伝えた。

### 調査内容

(1) 多次元自我同一性尺度（Multidimensional Ego Identity Scale, 以降MEIS；谷, 2001）

MEISは「自己斉一性・連続性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」、「心理社会的同一性」の4下位尺度各5項目、合計20項目で構成されている。「普段のあなたの考えや気持ちにどの程度あてはまりますか」という教示のもと、1「全くあてはまらない」、2「あてはまらない」、3「あまりあてはまらない」、4「どちらともいえない」、5「ややあてはまる」、6「あてはまる」、7「非常にあてはまる」の7件法で回答を求めた。MEISは恋愛関係の継続/終了にかかわらず、すべての対象者に回答を求めた。

(2) 「恋愛関係の影響」項目（高坂, 2010）

高坂（2010）は、高坂（2009）で行われた「恋愛関係の影響」項目の因子分析結果をもとに、項目を選定・追加して、再度因子分析を行い、「自己拡大」、「充足的気分」、「他者評価の上昇」、「時間的制約」、「経済的負担」、「他者交流の制限」、「関係不安」の7因子を抽出している。本研究では高坂（2010）で抽出された7因子について4項目を選定し、合計28項目を使用した。「その人（恋人）と付き合っていることについて、現在のあなたに以下の項目がどの程度あてはまりますか」という教示のもと、1「まったくあてはまらない」、2「あまりあてはまらない」、3「どちらともいえない」、4「ややあてはまる」、5「とてもあてはまる」の5件法で回答を求めた。「恋愛関係の影響」項目は、恋愛関係が継続している者にのみ回答を求めた。

なお、恋愛関係の継続/終了については、郵送する際に継続者用の質問紙と終了者用の質問紙の2部を同封し、該当する方に回答し返送してもらうことで確認をした。

## 3—— 結果

### MEIS・「恋愛関係の影響」項目の得点化

まず、MEIS 4下位尺度について、Time 1 恋愛群の回答をもとに、逆転項目の処理を行った後、 $\alpha$ 係数を算出した。その結果、「自己斉一性・連続性」が.87、「対自的同一性」が.83、

「対他的同一性」が .80、「心理社会的同一性」が .78と、いずれも十分な内の一貫性が確認された。そこで、下位尺度ごとに5項目の平均を算出し、得点とした（「自己斉一性・連続性」の得点を「自己斉一性・連続性」得点と呼び、以降同様）。

次に、「恋愛関係の影響」項目28項目について、高坂（2010）と同様の7因子構造になることを確認するため、7因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け、すべての因子間に共分散を仮定したモデルをもとに、確証的因子分析を行った（表1）。その結果、7因子か

表1 「恋愛関係の影響」項目の確証的因子分析結果と各項目の平均（標準偏差）

項目内容	自己拡大	充足的気分	時間的制約	他者評価の上昇	経済的負担	他者交流の制限	関係不安	平均値(SD)
<b>自己拡大</b>								
1.意志が強くなる	.57							3.50(1.02)
8.視野が広がる	.36							3.28(1.09)
15.自分に厳しくなれる	.40							2.88(1.11)
22.何事にも積極的になれる	.73							3.29(1.04)
<b>充足的気分</b>								
2.幸せだと感じる		.85						4.40(0.79)
9.気持ちが癒される		.82						4.23(0.91)
16.毎日が楽しい		.75						4.05(0.99)
23.気持ちが安らぐ		.84						4.30(0.85)
<b>時間的制約</b>								
3.生活のリズムが乱れる			.64					3.04(1.22)
10.身の回りがおろそかになる			.54					2.62(1.21)
17.自分のための時間が取れない			.89					2.69(1.31)
24.一人の時間がなくなる			.80					2.68(1.30)
<b>他者評価の上昇</b>								
4.周りの人から好意的に見られる				.77				3.20(0.98)
11.周りの人からの評価がよくなる				.91				3.00(0.99)
18.自分の評判がよくなる				.84				2.85(0.96)
25.周りの人からうらやましがられる				.60				3.29(1.15)
<b>経済的負担</b>								
5.交際費が負担になる					.85			2.68(1.23)
12.交際費がかかる					.89			2.92(1.30)
19.外食などで出費が多い					.68			2.97(1.31)
26.プレゼントなどでお金がかかる					.61			2.84(1.22)
<b>他者交流の制限</b>								
6.他の異性との交際が制限される						.72		2.86(1.46)
13.束縛されている気がする						.81		2.55(1.41)
20.友達と遊びに行きにくい						.80		2.35(1.35)
27.友達からの誘いを断ることが多い						.65		2.14(1.28)
<b>関係不安</b>								
7.その人の気持ちがいつも気になる							.75	3.43(1.23)
14.嫉妬する(ヤキモチをやく)ことが多い							.70	3.14(1.36)
21.漠然と別れることへの不安を感じる							.47	2.98(1.36)
28.いつもその人のことしか考えられなくなる							.75	2.74(1.32)
<b>因子間相関</b>								
	自己拡大	充足的気分	時間的制約	他者評価の上昇	経済的負担	他者交流の制限	関係不安	
充足的気分	.67***	—						
時間的制約	-.18*	-.24***	—					
他者評価の上昇	.63***	.43***	-.03	—				
経済的負担	-.08	-.14*	.51***	.02	—			
他者交流の制限	-.10	-.25***	.72***	-.01	.54***	—		
関係不安	.37***	.39***	.15*	.20**	.18*	.18*	—	
$\alpha$ 係数	.58	.88	.81	.85	.84	.83	.76	

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

注) 各項目の前の、「その人とつきあっていると、」は省略した。

らそれぞれに該当する項目に対し .35以上の影響力がみられた。適合度指標は、GFI=.855、AGFI=.822、RMSEA=.060、CFI=.909であり、モデルに対してデータは適合していると判断された。そこで、7因子について $\alpha$ 係数を算出したところ、.58から.88と、ある程度の内的一貫性が確認された。そこで、因子ごとに4項目の平均を算出し、得点とした。

### Time 2継続群とTime 2終了群におけるTime 1のMEIS及び「恋愛関係の影響」の比較

Time 2 継続群とTime 2 終了群について、Time 1におけるMEIS4得点及び「恋愛関係の影響」7得点を比較するため、交際状況(2)×性(2)の2要因分散分析を行った(表2)。なお、交際期間など、性以外にも重要な要因は存在すると考えられるが、対象者が少なく、これ以上要因を増やすことは、結果の一般化を困難にすると考えられるため、交際期間など他の要因を加えて分析することはしなかった(以下の分析についても同様である)。

その結果、交際状況と性の交互作用はみられなかった。MEISの「自己斉一性・連続性」

表2 Time 2 継続群とTime 2 終了群のTime 1 におけるMEIS4得点及び「恋愛関係の影響」7得点の比較

		交際状況		交際状況	F 値(df) 性	交互作用
		Time 2継続群 (149名)	Time 2終了群 (43名)			
MEIS	自己斉一性・連続性 (Time 1)					
		男子 (61名)	5.04(1.30)	3.91(2.03)	5.61(1,188)*	3.02(1,188) †
		女子(131名)	4.53(1.50)	4.36(1.56)	終了<継続	
	対自的同一性 (Time 1)					
		男子 (61名)	4.31(1.36)	3.81(1.52)	0.98(1,188)	1.21(1,188)
		女子(131名)	3.85(1.21)	3.88(1.44)		
	対他的同一性 (Time 1)					
		男子 (61名)	3.97(1.11)	3.11(1.08)	8.24(1,188)**	0.93(1,188)
		女子(131名)	3.96(1.32)	3.54(1.10)	終了<継続	
		心理社会的同一性 (Time 1)				
	男子 (61名)	4.43(1.27)	4.03(1.47)	1.42(1,188)	3.11(1,188) †	
	女子(131名)	3.91(0.97)	3.83(1.13)		0.62(1,188)	
恋愛関係の影響	自己拡大 (Time 1)					
		男子 (61名)	3.28(0.75)	3.11(0.94)	0.22(1,188)	0.82(1,188)
		女子(131名)	3.18(0.69)	3.24(0.74)		
	充足的気分 (Time 1)					
		男子 (61名)	4.20(0.83)	3.97(0.90)	7.17(1,188)**	1.10(1,188)
		女子(131名)	4.41(0.67)	3.88(0.92)	終了<継続	
	時間的制約 (Time 1)					
		男子 (61名)	2.79(0.99)	2.88(1.35)	0.21(1,188)	0.00(1,188)
		女子(131名)	2.82(1.03)	2.90(0.89)		
	他者評価の上昇 (Time 1)					
	男子 (61名)	3.15(0.89)	2.45(1.07)	9.66(1,188)**	1.90(1,188)	
	女子(131名)	3.17(0.84)	2.90(0.73)	終了<継続		
経済的負担 (Time 1)						
	男子 (61名)	2.94(1.06)	3.10(1.44)	0.45(1,188)	0.53(1,188)	
	女子(131名)	2.82(1.05)	2.93(1.09)		0.02(1,188)	
他者交流の制限 (Time 1)						
	男子 (61名)	2.80(1.10)	3.00(1.36)	0.11(1,188)	6.61(1,188)*	
	女子(131名)	2.40(1.09)	2.34(1.22)		女子<男子	
関係不安 (Time 1)						
	男子 (61名)	2.98(0.80)	2.73(1.30)	0.98(1,188)	2.29(1,188)	
	女子(131名)	3.19(1.04)	3.08(0.97)		0.13(1,188)	

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$ , †  $p < .10$

得点 ( $F_{(1,188)} = 5.61, p < .05$ ) と「対他的同一性」得点 ( $F_{(1,188)} = 8.24, p < .01$ )、「恋愛関係の影響」の「充足的気分」得点 ( $F_{(1,188)} = 7.17, p < .01$ ) と「他者評価の上昇」得点 ( $F_{(1,188)} = 9.66, p < .01$ ) において交際状況の主効果が有意であり、いずれもTime 2 継続群の方がTime 2 終了群よりも得点が高かった。

また、「恋愛関係の影響」の「他者交流の制限」得点において性の主効果が有意であり ( $F_{(1,188)} = 6.61, p < .05$ )、男子の方が女子よりも得点が高かった。

### Time 3 継続群とTime 3 終了群におけるTime 2 のMEIS及び「恋愛関係の影響」の比較

次に、Time 3 継続群とTime 3 終了群について、Time 2 におけるMEIS 4 得点及び「恋愛関係の影響」7 得点を比較するため、交際状況 (2) × 性 (2) の2 要因分散分析を行った (表3)。

その結果、「恋愛関係の影響」の「他者評価の上昇」得点において交際状況と性の交互作用が有意であった ( $F_{(1,145)} = 6.52, p < .05$ )。単純主効果の検定 (Bonferroni法) を行ったとこ

表3 Time 3 継続群とTime 3 終了群のTime 2 におけるMEIS4得点及び「恋愛関係の影響」7 得点の比較

		交際状況		交際状況	F 値 (df) 性	交互作用	
		Time 3 継続群 (126名)	Time 3 終了群 (23名)				
MEIS	自己斉一性・連続性 (Time 2)						
		男子 (46名)	5.04(1.25)	4.15(1.50)	2.03(1,145)	0.02(1,145)	1.42(1,145)
		女子(103名)	4.59(1.46)	4.51(1.61)			
	対自的同一性 (Time 2)						
		男子 (46名)	4.33(1.20)	3.75(1.47)	2.42(1,145)	0.12(1,145)	0.09(1,145)
		女子(103名)	4.13(1.36)	3.73(1.09)			
	対他的同一性 (Time 2)						
		男子 (46名)	3.81(0.99)	3.63(1.18)	0.10(1,145)	0.44(1,145)	0.12(1,145)
		女子(103名)	3.90(1.24)	3.91(1.14)			
		心理社会的同一性 (Time 2)					
	男子 (61名)	4.47(1.14)	3.73(1.29)	1.47(1,145)	0.00(1,145)	2.54(1,145)	
	女子(103名)	4.03(1.11)	3.99(1.07)				
恋愛関係の影響	自己拡大 (Time 2)						
		男子 (46名)	3.18(0.74)	3.04(0.77)	0.60(1,145)	0.05(1,145)	0.01(1,145)
		女子(103名)	3.13(0.63)	3.02(0.69)			
	充足的気分 (Time 2)						
		男子 (46名)	4.16(0.64)	3.88(0.97)	5.17(1,145)*	0.28(1,145)	0.34(1,145)
		女子(103名)	4.36(0.65)	3.87(1.04)	終了<継続		
	時間的制約 (Time 2)						
		男子 (46名)	2.93(0.98)	2.47(1.11)	2.27(1,145)	0.01(1,145)	0.25(1,145)
		女子(103名)	2.83(0.92)	2.60(1.02)			
	他者評価の上昇 (Time 2)						
		男子 (46名)	3.29(0.75)	3.34(0.44)	5.12(1,145)*	5.76(1,145)*	6.52(1,145)*
		女子(103名)	3.32(0.79)	2.42(0.93)	終了: 女子<男子, 女子: 終了<継続		
	経済的負担 (Time 2)						
		男子 (46名)	3.37(1.11)	3.34(0.86)	0.91(1,145)	3.00(1,145)†	0.72(1,145)
	女子(103名)	3.16(0.94)	2.73(1.03)				
他者交流の制限 (Time 2)							
	男子 (46名)	2.99(1.05)	2.88(1.05)	0.21(1,145)	4.24(1,145)*	0.00(1,145)	
	女子(103名)	2.49(0.99)	2.38(1.01)		女子<男子		
関係不安 (Time 2)							
	男子 (46名)	2.97(0.76)	2.59(1.22)	1.18(1,145)	1.34(1,145)	0.36(1,145)	
	女子(103名)	3.09(0.95)	2.98(1.01)				

\*  $p < .05$ , †  $p < .10$

る、Time 3 終了群において男子の方が女子よりも得点が高く、女子においてTime 3 継続群の方がTime 3 終了群よりも得点が高かった。

また、「恋愛関係の影響」の「充足的気分」得点において交際状況の主効果が有意であり ( $F(1,145) = 5.17, p < .05$ )、Time 3 継続群の方がTime 3 終了群よりも得点が高かった。

性の主効果については、「恋愛関係の影響」の「他者交流の制限」得点において有意であり ( $F(1,145) = 4.24, p < .05$ )、男子の方が女子よりも得点が高かった。

### Time 3 継続群とTime 3 終了群におけるTime 1 のMEIS及び「恋愛関係の影響」の比較

Time 3 継続群とTime 3 終了群について、Time 1 におけるMEIS 4 得点及び「恋愛関係の影響」7 得点を比較するため、交際状況(2)×性(2)の2要因分散分析を行った(表4)。

その結果、MEISの「心理社会的同一性」得点において、交際状況と性の交互作用が有意であった ( $F(1,145) = 4.43, p < .05$ )。単純主効果の検定を行ったところ、Time 3 継続群におい

表4 Time 3 継続群とTime 3 終了群のTime 1 におけるMEIS4得点及び「恋愛関係の影響」7 得点の比較

		交際状況 Time 3 継続群 (126名)	Time 3 終了群 (23名)	交際状況	F 値(df) 性	交互作用
MEIS	自己斉一性・連続性 (Time 1)					
	男子 (46名)	5.13(1.30)	4.63(1.31)	1.34(1,145)	1.45(1,145)	0.19(1,145)
	女子(103名)	4.56(1.52)	4.36(1.42)			
	対自的同一性 (Time 1)					
	男子 (46名)	4.39(1.41)	3.93(1.08)	1.12(1,145)	1.48(1,145)	0.24(1,145)
	女子(103名)	3.88(1.28)	3.71(0.70)			
	対他的同一性 (Time 1)					
	男子 (46名)	3.94(1.16)	4.08(0.90)	0.25(1,145)	0.00(1,145)	0.00(1,145)
	女子(103名)	3.94(1.34)	4.11(1.21)			
	心理社会的同一性 (Time 1)					
男子 (61名)	4.62(1.30)	3.55(0.62)	4.51(1,145)*	0.48(1,145)	4.43(1,145)*	
女子(103名)	3.91(0.98)	3.91(0.93)	継続：女子<男子, 男子：終了<継続			
恋愛関係の影響	自己拡大 (Time 1)					
	男子 (46名)	3.38(0.70)	2.84(0.83)	1.47(1,145)	0.43(1,145)	3.82(1,145) †
	女子(103名)	3.16(0.70)	3.28(0.67)			
	充足的気分 (Time 1)					
	男子 (46名)	4.24(0.76)	4.00(1.14)	0.94(1,145)	2.04(1,145)	0.16(1,145)
	女子(103名)	4.42(0.68)	4.32(0.66)			
	時間的制約 (Time 1)					
	男子 (46名)	2.79(1.01)	2.75(0.95)	1.30(1,145)	0.37(1,145)	0.92(1,145)
	女子(103名)	2.88(1.04)	2.37(0.96)			
	他者評価の上昇 (Time 1)					
男子 (46名)	3.16(0.93)	3.09(0.71)	3.10(1,145) †	0.80(1,145)	2.01(1,145)	
女子(103名)	3.27(0.78)	2.63(0.94)				
経済的負担 (Time 1)						
男子 (46名)	2.91(1.10)	3.09(0.88)	0.02(1,145)	1.20(1,145)	0.74(1,145)	
女子(103名)	2.85(1.08)	2.60(0.85)				
他者交流の制限 (Time 1)						
男子 (46名)	2.79(1.10)	2.88(1.20)	0.62(1,145)	1.58(1,145)	0.22(1,145)	
女子(103名)	2.34(1.09)	2.67(1.11)				
関係不安 (Time 1)						
男子 (46名)	3.00(0.69)	2.91(1.25)	0.28(1,145)	2.18(1,145)	0.84(1,145)	
女子(103名)	3.13(1.06)	3.47(0.95)				

\* $p < .05$ , †  $p < .10$



て男子の方が女子よりも得点が高く、また、男子においてTime 3 継続群の方がTime 3 終了群よりも得点が高かった。

このほかに交際状況の主効果、性の主効果が有意であった得点はみられなかった。

#### 4 — 考察

##### 恋愛関係の継続/終了の予測因としてのアイデンティティ及び「恋愛関係の影響」

本研究の目的は、アイデンティティ及び「恋愛関係の影響」の青年（大学生）における恋愛関係の継続/終了の予測可能性を明らかにすることであった。Time 2 継続群とTime 2 終了群との比較及びTime 3 継続群とTime 3 終了群との比較の結果を、表5にまとめた。

まず、「他者評価の上昇」得点について、Time 2 継続群の方がTime 2 終了群よりもTime 1の「他者評価の上昇」得点が高く、女子においてTime 3 継続群の方がTime 3 終了群よりもTime 2の「他者評価の上昇」得点が高かった。つまり、恋人とつきあっていることにより、自分に対する友人など周囲の他者からの評価が上がったと感じられていることが、3-4ヶ月後も関係を継続させる可能性を高めていることが明らかとなった。従来、恋愛関係は2者関係であり、“ロミオとジュリエット効果” (Doriscoll, Davis, & Lipetz, 1972) や浮気、排他性の研究以外では、恋愛研究において第三者の存在やその意義は十分に考慮・検討されてこなかった。しかし、本研究では、青年の恋愛関係の継続/終了に、第三者からの評価が関わっていることが示された。恋愛によって青年が成長すると指摘される (詫摩, 1973など)

表5 本研究結果のまとめ

		Time 2継続群と Time 2終了群との比較	Time 3継続群と Time 3終了群との比較
Time 1	MEIS	自己斉一性・連続性	終了<継続
		対自的同一性	
		対他的同一性	終了<継続
		心理社会的同一性	男子：終了<継続
	恋愛関係の影響	自己拡大	
		充足的気分	終了<継続
		時間的制約	
		他者評価の上昇	終了<継続
Time 2	MEIS	自己斉一性・連続性	—
		対自的同一性	—
		対他的同一性	—
		心理社会的同一性	—
	恋愛関係の影響	自己拡大	—
		充足的気分	—
		時間的制約	—
		他者評価の上昇	—
			終了<継続
			女子：終了<継続
			—
			—

注) 2 要因分散分析の結果のうち、関係の継続・終了に関わる結果のみ記載した。

が、実際に恋愛関係にある青年自身が、自分が恋愛によって成長しているのか、あるいはネガティブな方向に向かっているのかという判断をすることは困難である。そのような状態の中で、友人など周囲の他者からの評価は、恋愛関係にある青年にとって、自身の恋愛関係のあり方を判断する客観的指標のひとつとなっていると考えられる。そのため、周囲の他者からの評価が高まるということは、現在の恋愛関係がよいものであるという確信を青年に与え、そのため恋愛関係が継続することになると考えられる。

また「充足的気分」得点について、Time 2 継続群の方がTime 2 終了群よりもTime 1 の「充足的気分」得点が高く、Time 3 継続群の方がTime 3 終了群よりもTime 2 の「充足的気分」得点が高かった。つまり、恋人とつきあっていることにより、幸福感や安心感を得られていることが、3-4ヶ月後も関係を継続させる可能性を高めていることが明らかとなった。充足的気分は関係満足度や関係関与度とも関連しているものである（高坂, 2009）。Simpson (1987) では、関係が継続していた者の方が関係満足度が高かったことが示されている。このように関係満足度に関わるようなポジティブな気分を恋愛関係において感じられていることが、短期的な関係の継続を促すことが示唆された。

アイデンティティ (MEIS) については、Time 2 継続群の方がTime 2 終了群よりもTime 1 の「自己斉一性・連続性」得点と「対他的同一性」得点が高く、また男子においてTime 3 継続群の方がTime 3 終了群よりも「心理社会的同一性」得点が高かった。つまり、本来の自分自身と、他者（恋人）からみられている自分自身とが一致している、言い換えれば、ありのままの自分を恋人に見せ、恋人もありのままの自分を受け入れてくれていると感じられていることが、3-4ヶ月後の恋愛関係の継続を予測することが示された。また、男子において、恋愛関係をもつことで現実の社会の中で自分自身を意味づけられていると感じられていることが、8-9ヶ月後の恋愛関係の継続を予測することも明らかとなった。対他的同一性と心理社会的同一性はともに、外界の現実社会との関わりに関する「心理社会的自己同一性」を構成するものであり（谷, 2008）、外界との関わりに関するこれらの得点が恋愛関係の継続・終了を予測することは了解できる結果である。

また、心理社会的同一性については、男子において、恋人がいる者の方が、恋人がいなくて欲しい者や恋人を欲しいと思わない者よりも「心理社会的同一性」得点が高いことが明らかとなっている（高坂, 2011）。この結果からも、男子にとって恋愛関係をもつことは、心理社会的同一性の形成に大きく関わっていることが推察される。男子における恋愛関係をもつことの心理社会的同一性に対する意味・意義を検討するによって、心理社会的同一性が中期的な恋愛関係の継続の予測因となる理由を明らかにすることができると考えられる。

以上から、恋愛関係を継続するためには、日々の交際のなかで幸福感や安心感を得られ、また、友人など周囲から肯定的に評価されるような関係を築くことが必要であり、さらには互いの自由な時間を確保したり、恋愛関係を通して、恋愛関係という2者関係や現実社会との関係において自分を位置づけられるようになることが求められる。

しかし、自己斉一性・連続性や対他的同一性は、Time 3 継続群とTime 3 終了群との間でTime 2 の両得点について有意な差がみられていないことから、恋愛関係の継続/終了の予測可能性については、改めて検討する必要があると考えられる。

### 本研究の課題と今後の展望

本研究では、第1回調査の時点で恋人がいる大学生を対象に、その後2回の縦断的追跡調査を実施し、アイデンティティ及び「恋愛関係の影響」の青年期における恋愛関係の継続/終了の予測可能性を明らかにした。恋愛関係の継続/終了の予測因を検討するための縦断的追跡調査は国内では行われておらず、アイデンティティの観点から検討した研究は国内外を通して行われていないため、本研究は、青年期の恋愛や、恋愛と青年の人格発達との関連などを理解する上で新たな知見を提供することができたと考えられる。

本研究の課題として、まず対象者数の少なさがあげられる。特に、恋愛関係が終了した者は、第2回調査に返送した者(226名)の22.6%、第2回調査の時点で恋人がおり第3回調査に返送した者(150名)の15.3%であった。本研究の結果を一般化するためには、より多くの対象者による再検討が必要であると考えられる。

また、「他者評価の上昇」が、恋愛関係の継続/終了の短期的予測因となっていることが明らかとなった。恋愛関係という2者関係の継続・終了に第3者が関わっている点を明らかになったが、第3者の関わりとしては、相談や助言のような、より援助的な関わりも考えられ、そのような関わりの方がより一層、関係の継続の可能性を高めるのではないかと推察される。今後は、恋愛関係における第3者の関わりについて、詳細に検討する必要があると考えられる。

本研究では、約9ヶ月間の縦断調査を実施した。今後は、より長期間での実施をすることで、青年の恋愛の実態や、恋愛関係の継続/終了の予測因をより一層明らかにすることができると思う。

### 《引用文献》

- Doriscoll, R., Davis, K. E. & Lipetz, M. E. (1972). Parental interference and romantic love: The Romeo and Juliet effect. *Journal of personality and social psychology*, 24, 1-10.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*. New York: W. W. Norton. (エリクソン, E. H. 仁科弥生 (訳) (1977). 幼児期と社会1 みすず書房)
- Evans, R. I. (1967). *Dialogue with Erik Erikson*. New York: Harper & Row. (エリクソン, E. H. 岡堂哲雄・中國正身 (訳) (1981). エリクソンは語る 新曜社)
- Hill, C. T., Rubin, Z. & Peplau, L. A. (1976). Breakups before marriage: The end of 103 affairs. *Journal of social issues*, 32, 147-168.
- 高坂康雅 (2009). 恋愛関係が大学生に及ぼす影響と、交際期間、関係認知との関連 パーソナリティ研究, 17, 144-156.
- 高坂康雅 (2010). 大学生及びその恋人のアイデンティティと“恋愛関係の影響”との関連 発達心理学研究, 21, 182-191.

- 高坂康雅 (2011). “恋人を欲しがらない青年”の心理的特徴の検討 青年心理学研究, 23, 147-158..
- 宮下一博・白井永和・内藤みゆき (1991). 失恋経験が青年に及ぼす影響 千葉大学教育学部研究紀要, 39, 117-126.
- 日本性教育協会 (編) (2007). 「若者の性」白書 第6回青少年の性行動全国調査報告 小学館
- 大野 久 (1995). 青年期の自己意識と生き方 落合良行・楠見 孝 (編) 講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し—青年期 金子書房 pp.89-123.
- 大野 久 (1999). 人を恋するという事 佐藤有耕 (編) 高校生の心理—1 広がる世界 大日本図書 pp.70-95.
- Simpson, J. A. (1987). The dissolution of romantic relationships: Factors involved in relationship stability and emotional distress. *Journal of personality and social psychology*, 53, 683-692.
- 詫摩武俊 (1973). 恋愛と結婚 依田 新 (監) 現代青年心理学講座: 5 現代青年の性意識 金子書房 pp.141-193.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 谷 冬彦 (2008). アイデンティティのとらえ方 岡田 努・榎本博明 (編) 自己心理学5 パーソナリティ心理学へのアプローチ 金子書房 pp.6-21.

---

[こうさか やすまさ・和光大学現代人間学部心理教育学科専任講師]